

はじめに

人は誰しも幸せを求め、平和を願って生きています。しかし現実はその願いとは裏腹に不幸や苦悩、戦争や危機が溢れて暗澹たる様相が広がっています。進歩した科学文明により物質的には確かに便利で豊かになっているのですが、二十一世紀を迎えても幸せと平和の理想世界への道は閉ざされたままにあります。人類は未だにその解決の手立ても、指導理念も持ち合わせていないのです。

本書はその救いの道のキーワードが言葉であることを説いています。「光の言葉の活用」と「原点回帰」により、人類が営々と求め続けて来た理想を手に入れることが可能になることを提唱させていただいているのです。

精神世界の人達の間で最大の預言書の一つと評価されている日月神示の一節に「言葉は

神ぞ」と説かれています。この他にも数々の啓示・靈言・筆・神言などにも言葉の神性や言葉によって救いの道が開かれることが書かれています。

有名な哲学者のデカルトは「我思う故に我あり」と主張していますが、どうやらその「思う」奥に言葉が脈打っていることに気付いていなかったようです。実はデカルトに限らず言葉の本質を解明したものは、洋の東西を見渡しても皆無に等しかったのです。

10年程前筆者は「救いの道は言葉では？」と漠然と感じながら過ごしておりました。そのような最中に光透波（こうとうは）に出合い、その光彩陸離たる光透波理論の凄さに驚嘆し「これだ、ここに救いの道がある」と感激し、以後学び続けて今日に至っております。

文字の奥に潜む真理を読み解く光透波理論をベースにして纏め上げている本書は、人類がこれから歩む道への手引き書にもなっていると自負しております。何事も時と所と人に応じて対処しなければ事は成り立ちません。私たちが今日、言霊の国の日本の地に日本人として生まれ落ちてきたのも決して偶然ではありません。それ故にこの時代に生きる日本人としての責任を果たさなければならぬのです。

その責任とは何でしょうか？ それは世界の言語の中で最も宇宙に通じる言葉である日本語を使う民族としての使命です。世界で唯一の母音中心の言語である日本語は、母音から生み出される調和・大和の心を醸し出す力を有しています。この和の心をもって今日の混迷の世界に調和の波動を広げることです。

さて「時」というものはどのように捉えられるでしょうか、「時」こそ人類にとって、いや宇宙にとつて最も重要な要素の一つです。時↓トキ↓答基、そうです。時とは答の基、時が答の基になっている。時が来なければ答は明らかになりません。時こそ問題解決の答えを出す基本になっているのです。

時の法則には人は勿論、神も宇宙も従わざるを得ないのです。時は問題解決のキーポイントでもあるのです。

この時の視点から観ずると今日、世界人類は体主霊従の時代から霊主体従の時代へ、物質偏重の時代から物心調和の時代へ、比喩的に表現すれば夜の時代から昼の時代へと大きく移り変わる真つ只中に遭遇しています。

にも拘らず現代人は、この時代の大幅な転換に気付かず旧観念に囚われ右往左往して混乱を助長している……のが実情なのです。転換の時代を乗り越えてゆくには、この時の本質的意義を認識してゆかなければ、何事も錯誤を来し、矛盾と混乱を招くだけでなく、最悪の場合は滅亡せざるをえなくなるのです。

長年月にわたり人類世界を導いてきた宗教・哲学・科学等は、ちょうど夜に輝くローソクやランプや電気の光のような存在でした。時代は夜から一転、まぶしいばかりの太陽の光が燦々と降り注ぐ昼の時代を迎えているのです。その時代の大幅な転換に気付かずして、何時まで経つても夜の時代の光に頼り切つていては、文字通り昼行燈あんどんに縋たがっているようなものです。それでは何一つとして救いの道を見付け出すことはできません。かえつて時代錯誤の混乱・混迷に陥つてしまうことになるのが関の山です。正に現代の世界人類の姿を表わしているようなものです。

この時代の認識を切り替えることによつて人類の救いの道が開かれてゆくのです。時代は物金エゴの支配する闇の時代の生き方から、物心調和・共存共栄の昼の時代の生き方に

切り替えて行かなければならないのです。その太陽のごとく世界万民の上に輝き照らすものこそ、本書で繰り返し詳述しています光透波↓言霊↓光の言葉のエネルギーなのです。

あらゆる創造物の中で神は人間だけに言葉をお与えにされました。「人間」は「人言」。言葉に至ると書いて「至言」、その「至言」↓「始原」。そうです、言葉に至ることによって「始原のエネルギー」が発動するようになるのです。宇宙はそのように仕組みられていたと言ふことです。その至言への道が光透波への学びということですよ。

本書は新しい時代の言霊学・光透波の紹介書であるとともに、この時代の大転換期を乗り越える指南書であります。もつと言えば危機混乱に直面した世界人類を救う方途を伝える啓蒙書でもあります。表現を換えれば昼の時代への生き方を知らせる案内書とも言えますよ。

そのキーワードであり原点になるのが「言葉」であり、「言葉」↓「コトハ」↓「光透波」に繋がってくるのです。

「光の言葉で原点回帰」そこに人々が求める幸せの道が、世界人類の救いの道が開かれ

はじめに

ていたということです。導かれるままに纏め上げたものです。広く世に問う次第であります。

平成三十年五月 吉日

光透波和の会

宿谷直晃しゆくや
なほあき